

全労済協会 中央大学法学部公開講座

「福祉と雇用のまちづくり

～誰もが働き暮らし続けることができるまちづくりへ～

第11回 2022年6月29日

「超高齢社会の住み方・暮らし方」

株式会社未来企画代表取締役 福井大輔 氏

■多世代が交流し、医食住や学びを共にする複合施設アンダンチ

介護事業、障がい者支援、保育園や飲食店の経営、給食事業などを多角的に行っている株式会社未来企画の福井と申します。私たちは宮城県仙台市の若林区で、医食住と学びの多世代交流複合施設アンダンチを運営しています。

アンダンチの説明の前に私自身の話をすると、私は元々仙台出身で、住友商事東北株式会社に入社して金属グループで鉄に関する商売をしていたのですが、未来企画の母体である医療法人モクシン堀田修クリニックの堀田院長の長女と結婚したことを機に、福祉の世界に入りました。堀田修クリニックは腎臓の専門医が3人いて内科や人工透析を行っています。院長は高齢化する透析患者が週3回通院できるかを案じている患者の声を聞いて、透析患者さんが少しでも安心できる住まいを作れないかというところから事業が始まりました。未来企画は2011年に創業してメディカルサポート事業やコンサルティング事業から始め、2015年に福ちゃんの家という小規模多機能型居宅介護をスタートさせました。これは、デイサービス、訪問介護、ショートステイ、ケアプランの作成という4つの機能を有している事業所です。私自身、介護を知らずにこの世界に飛び込んだので、地域の方々の意見をよく聞くことを大切にしています。そして、一つの事業がうまくいったからといってそれを他の地域に横展開するのではなく、地域づくり(若林区は東日本大震災で移り住んできた人の多い地域です)、地域教育、子供・障がい者支援、介護・看護、医療など、地域の課題に対して多層的なアプローチで深掘していきたいという考えで事業を行っています。

2018年には、多世代交流複合施設アンダンチをオープンさせました。アンダンチとは、宮城の方言で「あなたの家(うち)」という意味です。立地は、若林区の震災復興の土地区画整理事業の中の医療福祉区画の中にあり、周辺に堀田修クリニックや福ちゃんの家があるという状況です。アンダンチのコンセプトとして、赤ちゃんから高齢者まで、障がいの有無に関係なく、それぞれの役割の中で心豊かに暮らすということを掲げています。アンダンチの中には、高齢者住宅の「アンダンチ Residence」を軸に、看護小規模多機能型居宅介護の「HOC カンタキ」、就労支援/コミュニティスペースの「アスノバ」、飲食/物販の「あんだんち食堂」、企業主導型保育所の「アンダンチ保育園」、駄菓子屋の「福のや」という6つの機能、サービスがあります。

■高齢者との接点がないなら、作るしかない

アンダンチでは各事業所のサービスの質の高さはもちろんのこと、「いかに地域の方にアンダンチに入ってきていただけるか」を大切にしています。それは、なぜか。認知症の高齢者と接したことがない方は、接し方がわかりません。しかし、これからは認知症の高齢者は必ず増えていきます

から、接し方は誰でもわかっておく必要があります。認知症の高齢者との接点がないなら、作るしかないという思いで、アンダンチを運営しています。障がいを持つ方との接点についても、身内に障がい者がいないと接点がなく、接点がないと関心を持っていないのではないかと思います。他人ごとではなく自分ごととして考えていただくために、接点を作りたい。そういう理由で、アンダンチの中には駄菓子屋がありますし、敷地内でヤギを飼っていて、そこに子供連れで散歩をしている方が動物と触れ合う目的で寄っていつてくれたりしています。

■地域住民にアンダンチに来てもらうための多数の動線を用意

福祉の課題は、自分ごととして考える人が社会の中でまだまだ少ないことだと思います。私は、地域の方が気軽に入れる動線を作り、地域の方に施設の空いている場所や、専門のスタッフを活用してもらいたいと考えています。例えば、先ほど少し触れたヤギを飼うこと一つをとっても、東北工業大学からヤギを2頭譲り受け、その学生とワークショップを行いながらヤギ小屋を作りました。2頭はアンダンチのマスコットのようになっていて、保育園児も地域の子供もヤギが大好きですし、就労支援のメンバーさんたちが定期的にシャンプーし、お散歩もしてくれます。小屋の掃除や餌やりは事業所の持ち回りとして、たくさんの方が関わる仕組みを作っています。また、対外的なイベントとして夏祭り、クリスマス・マーケット、親子英会話教室、子育てサークルへの場所提供、子供会の陶芸教室や芋煮づくりへの場所提供、乳幼児の食事相談会など、地域とアンダンチが触れ合うための様々な動線を用意しています。中にはコロナで開催が難しくなったものもあるので、今後どのように再開していくかが課題の一つになっています。

■人とのつながりは人生を豊かにする

最近、「社会的処方」という言葉を聞く機会が増えていると思います。これは、薬を処方することで患者さんの問題を解決するのではなく、「地域とのつながり」を処方することで問題を解決するというものです。高齢者の孤独は、一日にたばこを15本吸うことと同じくらい、身体によくないというイギリスの説もあります。地域とのつながりを処方するという文脈で、私たちも2022年6月に、「荒井まちのわ図書館」をオープンさせました。シェア型図書館として、交流の場として、あんだんち食堂やアスノバのアンテナショップとしての機能を持ち、地域住民と運営・活用していく考えです。私たちはアンダンチという場を持つことで、地域の声を聞くことができるようになりました。建物完結型ではない、福祉施設として地域との接点となる「賑わいづくり」に取り組んでいます。

アンダンチの高齢者住宅には、自立している方から要介護5の方まで入居しています。サービス付き高齢者住宅でお看取りまでやるところは少ないのですが、私たちは医療と連携しながら、その人らしい暮らしを最期までサポートしていきたいと思っています。私たちはこうした形で福祉に取り組んでいるのですが、それが利用する方の選択肢の一つになればいいと考えています。コミュニティの中で暮らしたい人もいれば、そうではなく高級ホテルのようなところで静かに暮らしたい人もいます。しかし、大事なことは選択肢を示すことです。そのためには情報発信も大事ですし、「人とのつながりは人生を豊かにする」という考えも伝えていきたいと思っています。

<文責：全労済協会調査研究部>